

# 論文審査の結果の要旨

氏名 宮本 万理子

本論文は全6章から構成される。

第1章では、研究背景および既往研究の整理がなされ、歴史性を有した景観の保全を考えるにあたり、現存する景観から過去の履歴が解釈されることが重要であるとする立場が示されている。さらに、こうした観点から、変化が著しく過去の痕跡が乏しいとされる景観であっても、そこから履歴が解釈されるのであれば保全の対象になりうることが指摘されている。そして、こうした認識にもとづき、首都郊外に位置し景観変化が著しい下総台地を対象として、近世期に創出された牧景観の特徴とその変容過程を解明することを通して、牧の履歴が解釈される景観の特徴を解明することが、本研究の目的として提示されている。

第2章「牧景観の特徴の解明」では、小金牧周辺野絵図（1672年）、小金牧絵図（1862年）等の古地図および文献調査から、近世期の牧景観の特徴が明らかにされている。さらに、牧景観に変化をもたらした主要な要因である、「払い下げ」及び「上地」に関して、社会背景も含めて詳細な説明がなされている。

第3章「牧の払い下げ形式にもとづく景観変容の解明」では、第2章の結果を受け、近世期の牧景観の変容に影響を与えたと考えられる牧の払い下げ地域を特定し、「1672年～1869年払い下げ地域」、「1869年上地地域」ごとに、近代化以降の景観変容が明らかにされている。さらに、景観の変容に影響を与えた社会背景について、文献調査をもとに考察されている。

第4章「牧の払い下げ形式にもとづく景観の特徴の解明」では、第2章から第3章で得られた結果をもとに、牧の履歴がとくに表出しやすいと考えられる「農林地の構成」および「街路パターン」に着目し、「1672年～1869年払い下げ地域」と「1869年上地地域」ごとに、牧の履歴が解釈される景観の特徴が明らかにされている。

第5章では、第2章から第4章までの結果のまとめと今後の課題について整理がなされている。

第6章「土地履歴の解釈にもとづく景観の捉え方の検討」では、第1章で述べられている新たな価値基準にもとづく景観の捉え方が、従来の捉え方との比較を通じて明瞭に示されており、既往の文化的景観の概念に対して、新たな視点を与えている。

論文審査においては、本研究における景観の定義の明確化するとともに、近世における牧景観の特徴を把握する際の考察の妥当性、景観変容の経緯にもとづく景観の解釈の手続き上の妥当性について、更なる検討が必要であるとの指摘がなされた。また、全体を通して必要な基礎的情報が欠如している点が指摘され、特に、対象地の選定理由、近世期の牧景観の特徴を示している図中の凡例の記述、景観の特徴分析に用いた分析単位

に関する説明などについて、必要な情報が不足しているため、更なる記述が必要であることが指摘された。

しかし、下総台地に江戸時代に開かれた牧の分布やその払い下げ時期によって異なる開発形態の違いが、農林地の構成や街路パターンとして現代の景観に表出していることを明らかにし、当地における歴史的な景観の保全に対して示唆が得られたことは高く評価され、学位に値する成果との結論に至った。論文審査における上記の指摘は、その後の修正を通じて最終提出稿に的確に反映されている。

なお、本論文の第2章から第6章にかけては、横張真、保科宇秀、渡辺貴史との共同研究の成果を含むものであるが、いずれの章の議論も、論文提出者が主体となって分析及び検証を行ったもので、論文提出者の寄与が十分であると判断する。

従って、博士（環境学）の学位を授与できると認める。